

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 5日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21530723

研究課題名（和文）

思春期の多面的子育て支援プログラムの開発と効果測定

研究課題名（英文）

Development of multifaceted psychoeducational programs for supporting parents of teenagers and measurement of their effectiveness

研究代表者

平石 賢二 (HIRAISHI KENJI)

名古屋大学・教育発達科学研究科・教授

研究者番号：80228767

研究成果の概要（和文）：

本研究では、思春期の子どもをもつ親を支援するための多面的な心理教育プログラムを開発し、その効果を検証することを目的とした。思春期の子どもとその親を対象にした基礎的な調査研究と行動観察の研究成果に基づき、3種類の心理教育的プログラムを開発した。第1のプログラムは、養育態度尺度を使用して親が子どもに対する認知や感情、行動についての理解を深めることを目的とするものである。第2のプログラムは、親子間葛藤の理解と葛藤解決の方法について学習するためのプログラムである。そして、第3のプログラムは、子どもとの良好な関係を構築、維持するための行動を理解するためのプログラムである。また、これらのプログラムの効果を測定するための尺度を開発した。この尺度は子育て支援プログラム体験尺度と命名され、4つの下位尺度（自己の理解と向上、子育ての動機づけ、肯定的な気持ち、否定的な気持ち）から構成された。中学生の子どもをもつ親に対して、これらのプログラムと子育て支援プログラム体験尺度を実施した結果、思春期の子どもをもつ親にとってこれらのプログラムは有用であり、学習のための良い機会を提供していることが検証された。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study was to develop the multifaceted programs for supporting parents of teenagers, and to measure their effectiveness. Based on the findings by longitudinal questionnaire survey and observational study, three kinds of psychoeducational programs were developed. The first program was for helping to understand attitude toward teenagers by the scale for parenting attitude. The second one was to learn psychological mechanism, which generated conflicting communication between parent and child, and to learn conflict resolution strategies. The third one was to learn parenting skills for making and sustaining good relationships between parent and child at puberty. In order to test their effectiveness, the scale for measuring participant's experience on programs was developed. The results suggested that all of these programs were useful for participants who have a child/children at puberty.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：臨床心理学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：思春期，子育て支援，親子関係，養育態度，地域援助，心理教育的プログラム

1. 研究開始当初の背景

思春期は心身の発達の変化が著しく、また、短期間で学校環境の移行を繰り返すなど、心理的適応の課題を抱えやすい時期とされている。また、大人に対する態度も変化しやすく、古くから第2反抗期と言われるように、特に親との権威関係をめぐる葛藤が生じやすいと考えられている。このような親子関係の葛藤は子どもだけでなく、親にとっても心理的負荷のかかるものである。そのため、親は成長しつつある子どもとの関係や親役割を見直し、子どもに対するモニタリングや統制の調整や適度な心理的距離を模索することが課題とされている。近年、欧米においては、こういった思春期の子育ての難しさに対して、親を支援する必要性が強調されるようになっており、実践研究も始まってきている。しかし、日本における子育て支援に関する研究と実践は、乳幼児の子育て支援と、発達障がいや不登校など特定の問題を抱えている保護者への支援が中心であり、一般的な思春期特有の子育ての難しさに焦点をあてた研究と実践は殆ど行われてきていない。

筆者はこのような問題意識に基づき、平成19年度から20年度にかけて「思春期の子育て支援プログラムの開発（科学研究費補助金基盤研究C：課題番号19530618）」という課題の下で、研究を開始し、養育態度尺度を使用して思春期の子どもをもつ親が自己理解を深めるための心理教育的プログラムを開発した。

本研究は、この研究を継続させ、さらに多面的な観点からプログラムの開発と効果測定を試みるものである。

2. 研究の目的

本研究では、先行研究において開発された養育態度尺度を使用してデータをさらに蓄積し、その有効性を検証する。また、先行研究で実施してきた思春期の子育てに関する縦断調査を継続して実施し、さらに行動観察法により親子間コミュニケーションに関するデータを収集する。そして、それらの基礎

研究の知見に基づいて、新たな子育て支援のための心理教育プログラムを開発し、それらの効果を検証することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 研究Ⅰ-基礎的研究

①質問紙法を用いた縦断調査：平成21年8月に郵送調査を実施した。対象者は平成20年度までの縦断調査に参加していた青年期前期から中期にかけての子どもとその親である。調査対象者の親には「子どもの成長に対する認知・感情尺度」、「思春期の子育て態度尺度」、「養育スキル尺度」、「相互信頼感尺度」、「自尊感情尺度」等を実施した。また、子どもには「子どもが認知した思春期の子育て態度尺度」、「相互信頼感尺度」、「自尊感情尺度」、「友人関係コンピテンス尺度」等を実施した。

②行動観察法による親子間コミュニケーションの分析：平成21年7月～9月にかけて、中学1、2年生とその母親を対象にして、親子で意思決定をする課題を提示し、その課題に取り組む際の言語的コミュニケーションを分析した。分析に際しては、Condon, Cooper, & Grotevant (1984) や Bengtson & Grotevant (1999) によって開発された言語的相互作用のコード化システムを利用した。

(2) 研究Ⅱ-多面的子育て支援プログラムの開発と効果測定

①養育態度尺度（以下、PATと略す）を使用したプログラム：「子どもの成長に対する認知・感情尺度（肯定的認知・感情と否定的認知・感情の2下位尺度から構成）」、「思春期の子育て態度尺度（不安定な態度、威厳ある態度、適切な心理的境界、主体性の尊重の4下位尺度から構成）」、「養育スキル尺度（道徳性スキル、自尊心スキル、理解関心スキルの3下位尺度から構成）」の3つの養育態度関連の尺度を含んでいる心理テストを使用し、子どもに対する養育態度に関する自己理解を深めることを目的としたプログラムである。プログラムは、約2時間、趣旨説明、

PATの実施と自己採点、解説、参加者同士の少人数グループでの話し合い、質疑応答、事後アンケートの実施、の順に行われた。事後アンケートは、「子育て支援体験尺度（自己の理解・向上、子育ての動機づけ、否定的な気持ち、肯定的な気持ち、の4下位尺度合計17項目から構成、各項目1点から5点までで3点がニュートラル）」と命名された尺度を使用した。

②親子間葛藤と葛藤解決の理解を深めるためのプログラム：プログラムは導入、展開（ステップ1、ステップ2）、まとめの3段階で構成され、実施時間は約2時間である。展開のステップ1では、中学生男子と母親の間で言い争いが生じている逐語的な仮想の会話例を提示し、その会話について、a. 親子それぞれの立場から何が問題であるかを考えること、b. 親子それぞれの立場からどのような言葉を発したら言い争いにならずに済んだか、言い換える言葉をできる限り多く考えること、c. 考えた代替案の中で最も良い発言（解決策）を選ぶこと、の3つの問いを提示した。そして、回答後に少人数グループで互いの回答を披露し合い、自由に感じたことを話し合うように求めた。また、その際には互いに支持的、受容的に接し、他者の意見を尊重するよう求めた。ステップ2では、日常生活の中で仮想事例のような言い争いが生じたことは無かったか、過去の類似した体験を想起し、それを書き留め、a. そのような言い争いは何故生じたのか、b. どのようにすれば上手く回避したり、解決することができるのかを考えるよう求めた。そして、回答後は再び少人数グループで話し合いをもった。まとめの段階では、親子間葛藤と葛藤解決のメカニズムを説明するのに有効な心理学研究の理論や上述の基礎研究の成果を紹介し、その後自由な質疑応答を行った。終了後には事後アンケートとして前述の「子育て支援プログラム体験尺度」を実施した。このプログラムは、次に述べるプログラムと合わせて、平成24年2月から3月にかけて、3回、合計23名（母親21名、父親2名）の中学生の親に実施した。

③子どもとの良好な関係性を構築・維持するスキルを学習するためのプログラム：プログラムは導入、展開（ステップ1、ステップ2）、まとめの3段階で構成され、実施時間は約1時間20分であった。ステップ1では、仮想事例を用いて子どもとの良好な関係性について理解することを目的とした。参加者は、事例を読み、子どもはどのような気持ちであるか、参加者が親の立場ならどのような言葉かけやかかわりをするか記述するように求

められた。その後、少人数グループでの話し合いが行われ、グループ内で出された意見を代表者が発表した。そして、ステップ1に関する説明を行った。ステップ2では、仮想事例のような体験が日常生活でなかったかを想起させ、それを書き留めるように求められた。また、そのような場面でどのような工夫をしたのか、子どもとどのように関わったら上手くいったのか、上手くいったことや工夫を記述するように求められた。そして、再度、少人数グループで話し合い、発表を行った。最後にまとめと解説が行われ、終了後に事後アンケートとして、前述の「子育て支援プログラム体験尺度」を実施した。

4. 研究成果

(1) 質問紙による縦断調査の結果、養育態度の安定性の高さ、養育態度は相互信頼感を媒介して子どもの心理的適応に影響を及ぼしている可能性があること、などが明らかにされた。その他、思春期の養育態度とその影響に関する研究知見が得られたが、これらの研究知見は、子育て支援プログラムにおける課題の作成や解説等に役立てた。また、今後の課題である親に対する情動的サポートにおいて役立てていく計画である。

また、行動観察法によって分析された親子間コミュニケーションの結果については、子育て支援プログラムの課題作成と親子間葛藤と葛藤解決のメカニズムに関する解説において活用された。

(2) 上述した3つの心理教育プログラムを実施した後の「子育て支援プログラム体験尺度」の結果（平均値(SD)）は、a. PATを使用したプログラム、b. 親子間葛藤と葛藤解決の理解の深めるためのプログラム、c. 子どもとの良好な関係性を構築・維持するスキルを学習するためのプログラムの順に次のようであった。「自己の理解・向上」得点 a:4.31(.45), b:4.36(.46), c:4.35(.45), 「子育ての動機づけ」得点 a:3.35(.62), b:3.34(.59), c:3.47(.59), 「否定的な気持ち」得点 a:1.72(.72), b:1.61(.48), c:1.38(.56), 「肯定的な気持ち」得点 a:4.33(.58), b:4.45(.73), c:4.40(.67)。

これらの結果から、3種類の異なるプログラムにもかかわらず、参加者の体験としては、極めて類似した結果が出ており、全体として「自己の理解・向上」と「肯定的な気持ち」は高く、「否定的な気持ち」は低いが、「子育ての動機づけ」に関してはニュートラルよりはやや肯定的な程度のレベルに留まっていた。目標設定の異なるプログラムにもかかわらず、参加者の体験として類似した傾向が見られる理由については、これらが少人数グループによる演習形式のプログラムであり、参

加者自身で取り組むワークと、グループでの話し合いというワークの組み合わせから構成されているという共通点があるため、課題そのものの内容の違い以外の側面が影響しているとも考えられる。しかし、子育て支援プログラム体験尺度自体の特徴など、他の要因も考えられるため、全く異なる形態のプログラムを実施しながら比較検討していく必要がある。

また、P A Tを用いたプログラムに関しては、P A Tの得点と子育て支援プログラム体験尺度得点との関連を検討し、望ましくない養育態度が示された参加者は、否定的な気持ちの得点が高くなっていることも示された。そのため、参加者にとってのプログラムの効果には個人差が大きく、参加者の特徴を考慮する必要性も示唆された。

(3) 今後の課題：本研究においては、思春期の子どもに対する養育態度に関連する質問紙法や行動観察法を用いた基礎研究の成果に基づいて、3種類の心理教育プログラムを開発した。また、これらのプログラムがどのような効果をもつかを検証するために、子育て支援プログラム体験尺度を開発し、それぞれのプログラムの後に事後アンケートとして実施し、いずれのプログラムも参加者にとって意義のある有用なものであることが窺われた。しかしながら、プログラムが体験としては有益であったと理解されたとしても、どのような態度変容を引き起こしているのか、プログラム実施後も持続する態度変容の効果があつたのか、という問題については検討できていない。また、単独のプログラムに関する効果だけではなく、複数のプログラムを組み合わせ、長い期間実施するようなプログラムを構成する際に、どのようなプログラムの組み合わせが必要なのかという点についても検討されていない。さらに、基礎研究の成果により、思春期の子育てにおいて重要な知見、情報が得られたが、それらの情報を適切なメディアを利用して、保護者に伝達するような情動的サポートの方法を開発することも今後の課題であると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ①渡邊賢二・平石賢二 東海心理学研究 査読有 2012年 16-23頁
- ②平石賢二 思春期の反抗と親のストレス教育と医学 査読無 第59巻 2011年 22-28頁
- ③平石賢二 思春期の反抗がもつ意味-反抗する子としない子 児童心理 査読無 第65巻 2011年 81-86頁
- ④渡邊賢二・平石賢二 母親の養育スキルと

子どもの心理的適応に関する縦断的検討 家族心理学研究 査読有 第24巻 2010年 171-184頁

⑤平石賢二 親はいつ、どのように子どもから手を離していくか 児童心理 査読無 第64巻 2010年 437-441頁

[学会発表] (計10件)

①平石賢二・渡邊賢二・杉浦祐子 思春期の友人関係におけるコンピテンスと親子関係 (1)-母親の子どもの成長に対する認知・感情、養育態度との関連から- 日本発達心理学会第23回大会 2012年3月10日 名古屋国際会議場(名古屋市)

②渡邊賢二・平石賢二・杉浦祐子 思春期の友人関係におけるコンピテンスと親子関係 (2)-母親の養育スキルとの関連- 日本発達心理学会第23回大会 2012年3月10日 名古屋国際会議場(名古屋市)

③平石賢二・渡邊賢二 思春期の子どもと母親の相互信頼感 (1)-母子の相互信頼感における時間的変化と相互規定性- 日本家族心理学会第28回大会 2011年8月28日 鹿児島女子短期大学(鹿児島市)

④平石賢二・渡邊賢二・杉浦祐子 思春期の子どもと母親の相互信頼感に関する縦断研究 (1) 日本発達心理学会第22回大会 2011年3月26日 東京学芸大学小金井キャンパス

⑤渡邊賢二・平石賢二・杉浦祐子 思春期の子どもと母親の相互信頼感に関する縦断研究 (2) 日本発達心理学会第22回大会 2011年3月26日 東京学芸大学小金井キャンパス

⑥渡邊賢二・平石賢二 中学生の母親を対象とした子育て支援-養育態度の尺度を用いて 日本家族心理学会第27回大会 2010年8月22日 こどもの城会議室(東京都渋谷区)

⑦平石賢二・渡邊賢二 思春期の子どもの成長に対する母親の認知・感情と養育態度との関連に関する縦断的研究 日本発達心理学会第21回大会 2010年3月27日 神戸国際会議場(神戸市)

⑧ 平石賢二・渡邊賢二 The links of perceived parenting with sense of mutual trust and psychological adjustment in adolescence. Paper presented at 13th Biennial Meeting of Society for Research on Adolescence, 2010年3月13日 Philadelphia:PA

⑨平石賢二・渡邊賢二 思春期の子育て支援プログラム-養育態度尺度を用いた自己理解促進の観点から 日本家族心理学会第26回大会 2009年8月23日 大阪市立大学杉本キャンパス

⑩渡邊賢二・平石賢二 母親の養育スキルと母親と子どもの相互信頼感との関連 日本

家族心理学会第26回大会 2009年8月23日
大阪市立大学杉本キャンパス

〔図書〕(計1件)

①平石賢二(編著) 改訂版 思春期・青年
期のころ-かかわりの仲での発達- 北樹
出版 2011年 54-74頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平石賢二 (HIRAISHI KENJI)

名古屋大学・教育発達科学研究科・教授

研究者番号: 80228767

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

渡邊賢二 (WATANABE KENJI)

鈴鹿医療科学大学・准教授

研究者番号: 50369568